

# 放送委員会に意欲と誇りを

—放送コンテストで入賞めざせ タブレットPCが声、表情、姿勢を正す道具に—

小城市立三里小学校 教諭 片瀬 浩也

[miato@saga-ed.jp](mailto:miato@saga-ed.jp)

キーワード：放送コンテスト、TPC（タブレットPC）で協働学習

## 1. 従来の課題

規則正しい生活を送るためには、まず時間を正しく守ることが絶対条件である。5分前行動など、準備ができていてこそ、すべての授業がうまくいくのである。

5・6年生数名の児童による放送委員会の仕事は、正しく情報を伝えることであり、時間を守ることが求められる。

昼休みの終わりの合図であり、掃除の始まりの合図である放送は、午後の無言掃除へと導くためには欠かせないものである。とくに、ノーチャイムの学校では、時間を見ながら行動しているが、時計を読めず学校生活に慣れない低学年の児童には必要である。委員会活動の中でも放送委員会は責任の重い仕事である。

仕事の重要性を意識できず昼休みに遊ぶことに集中し委員会の仕事を忘れる児童が多く、仕事を任されている自覚を持たせるために注意することを繰り返している現状があった。

## 2. 目的・目標

### 2. 1 委員会の仕事に意欲と責任感を持たせる

話し方や滑舌のよさ等のスキルを高め、まわりの評価を上げることで、仕事に対する意欲を高め、自分の役割や責任を果たそうとする児童を育てる。放送委員会の仕事に意欲を持って取り組ませたい。放送委員会の必要性や、やりがいを感じられるような取り組みが必要であり自分たちの仕事の重要性を感じさせられる必要がある。

### 2. 2 放送コンテストでの入賞する目標を持たせる

佐賀県放送コンテスト（アバンセ杯）に入賞する目標を持ち、子ども同士で学び合い、タブレットPCで確認し合いながら上達する。放送技術を競い合う佐賀県放送コンテストに参加し入賞する目標に向かって努力することで、放送技術を高めるとともに下級生への手本となる。

## 3. 実践内容

### 3. 1 指導者の育成が児童の伸びにつながる

少子化が進み、年々学校の規模が縮小し、職員数も減少している。職員数の関係で、委員会活動を指導する優れた技量を持たずに担当することも少なくない。放送委員会の担当は、放送機器を準備し情報機器を操作することと放送委員会の児童を指導することになることが多い。情報機器の操作は慣れているが、放送技術には自信がない。放送に慣れ上達したいが、全校朝会や校内においても、放送することがあまりないこともあり、自信を持って苦勞していた。そこで、児童に正しい指導がしたくて佐賀県放送コンテスト指導者研修会に参加することにした。

佐賀県では、アナウンスや朗読に興味があり、自信のある児童・生徒を対象に毎年1月にアバンセ杯放送コンクールが行われている。今年で13回目を迎え、ますます参加者が増えている。佐賀県の高校生は本年度のNHK杯全国高校放送コンテストにおいても優秀

な成績を収めている。その優秀な生徒を輩出してきたアバンセ杯指導者のための事前研修会が夏季休業中に開催されている。夏季休業中ということもあり、高校の放送部の生徒も参加して行われている。佐賀龍谷大学の天野紘教授と高校の放送部の教師が大会に参加する児童・生徒を指導する小・中学校の教師に対して研修する。だが、実際に見本を見せるのは、全国でも活躍する高校生である。最近まで中学生であった生徒に指導されるのは抵抗があったが、すぐに高校生の素晴らしさを認めることになる。

教師が課題文を一通り読んだ後、高校生が読むと大人と子供ほどの違いがある。高校生以上にアナウンスが上達したいと意欲が増し真剣に研修会に望むことができた。研修会で指導された内容ですぐに改善された部分は、一文の「が」「は」などの助詞や「でした」などの文末などを強調しすぎる部分だった。助詞を強調することを直す聞きやすくなることを実感した。早口言葉もまともに言えないことに気付き、割り箸を歯で挟みながら笑顔の練習したり、鏡を見ながら発音したりすることで、口形を気にしながら練習に励んだ。夏季休業中に練習に励み、9月の委員会までには少しは上達してきた。また、毎朝の計算タイムのアナウンスをさせてもらうことで、自分の声にも慣れ、緊張感が薄れていくと共に、指導者としてのアナウンス技術も上達していき「いい声ですね」と職員や児童の評価も上がってきた。

2学期からは、天野教授が講義で活用しているテキストを児童の指導に活用した。姿勢よく長く息を出すことから始まり、発声練習、早口言葉、口の開け方の指導、アナウンス原稿読みと委員会活動の度に少しずつ取り組んでいった。給食時間は4人ずつの当番が全員集まる時間でもあり、課題を出しておく、楽しみながら早口言葉の練習課題をこなすようになってくれた。5、6年が同じ課題に挑戦し上達することで、児童の実力も上がり、アナウンス技術を徐々に高めあうことにつながった。

2学期も後半になると、「校内放送が聞きやすくなった」と周囲の評価が上がり始め、管理職や担任の先生方から誉められる経験が児童のモチベーションを挙げるようになった。時間を守ることを注意ばかりしていた1学期がうそのように、児童を誉めることが増えた。委員会の仕事に対する自覚や責任感まで感じられるようになった。毎月1時間の委員会活動でも、アナウンスの早口言葉などの練習課題を出されることを楽しみに待つようになり、喜んで委員会活動に参加する姿が見られるようになった。

### 3. 2 自分の声を知り、慣れることで上達する

放送委員会の大きな仕事に、運動会のアナウンスがある。選ばれた5、6年生の4名ずつ計8名が担当する。校内放送でも緊張する児童に、本番で緊張しないように、体育館で実際にマイクを使い、自分の声を感じながら大きな声で原稿読みの練習をさせた。

アドリブの言葉も事前に用意させ、その場に選手が

走っているように想像させながら体育館に響く自分の声を確認させた。自分の声と実際にマイクを通してスピーカーから流れる声は別物である経験を積むことも大切であり、当日に向けて大切な準備である。本番では、はきはきとした声で原稿を読み、実況中継も準備した言葉を組み合わせて上手に放送することができた。

### 3. 3 放送コンテストに挑戦する。

毎年1月の第4週末に開催される佐賀県放送コンテスト（アバンセ杯）に参加したい児童を6年生の学年朝会にて募集してみたところ5名の児童が希望して練習が始まった。5名中で3名が放送委員会であったが2名はまったく練習をしていない児童であり指導する立場としては不安であった。他の行事と重なり練習していない1名は辞退することになり4名で参加した。当日はアナウンス部門に110名の小学生が参加したが、上位20位までに4人中3名が入賞した。1名は優良賞に入り、奨励賞2人、努力賞1名とよく頑張った。最後は練習に参加した4人がそろって全校朝会で表彰を受けることができた。

大会に向けての練習時間は短い。大会の課題文が12月に配布されて1月に大会当日を迎えることになり練習する時間と場所は限られていた。練習は昼休みのみで空き教室に集まり、ポータブルアンプとマイクを使い自分の声を聞きながら練習した。児童は家庭での練習にもまじめに励み、天野教授の「美しい日本語練習帳」練習テキストに従い、ロングブレスなどの腹式呼吸での発声練習や鼻濁音の練習、早口言葉の練習にも励んだ。口のあけ方や目線などの動きは、なかなか指導しても児童は正確に実感できない。ここで、タブレットPCを使用した。児童の練習の様子をカメラで撮影し、実際に目線や口のあけ方などを見せることがお互いに納得し改善していける方法であった。簡単に撮影できる上に、注目したい部分を拡大することも指で画面を触るだけですぐできる。口の動きだけに注目させたいなど、指導したい部分を見える化できることは、短時間での上達にも大きく貢献していた。

会場はアバンセという佐賀県の施設で300名収容できるホールにて行われる。緊張感は運動会のアナウンス以上である。そこで、最後の数日は、体育館で本番のようにステージに講演台を置き、スタンドマイクを使いながら練習を行った。姿勢も審査員に与える影響は大きいと考え、歩く姿勢から最後の挨拶までを撮影した。児童にタブレットPCを与え、実際に撮りあうことで、自主的に改善していくなど、お互いにアドバイスの姿が見られた。入賞する目標と姿勢などの



写真1 体育館のステージ上での学び合い

## 4. 成果

アバンセ杯放送コンテストの表彰後、委員会改正が行われた。3月に行われた次年度の委員会に第一希望

で放送委員会に選ばれた子どもは、あの6年生のように放送コンテストに参加して入賞したいと意欲をみせ、将来はアナウンサーになりたいと夢を持っていることを話してくれた。他にも進んで放送委員会を選んでもくれた子が増え、放送委員会の存在価値が以前より上がったと感じることができた。

放送委員の仕事に充実感を持ち、責任もって放送できることをねらった実践であり、日々の放送時間を守り、より伝わりやすくするために、叱るばかりでなく、まず、教師自ら、児童の放送意欲を向上させるために講習を受けることが、児童に認められる第一歩であった。正しい放送の仕方を伝達することで、意欲と充実感を持たせ、放送委員会の仕事に意欲を持たせるためには、自信を持たせることが近道だと考え、講習会でであった大学教授が作成した「日本語練習帳」をもとに教師も一緒に練習に励んだことは有効であった。

上達した児童の放送を聞き、昨年までは参加していない「アバンセ放送コンテスト」に出場することを6年生の先生より薦められるなど、委員会担当以外の先生方に誉められることが児童の意欲を増した要因である。その気になった6年生の4人が入賞することを目指しながら練習に励むことで、アナウンスが上達し、学校の放送委員会の仕事に喜びと誇りを持ち、意欲的に取り組むようになってきたことが大きな成果である。

進んで練習し自信をつけたことを誉められることで、



写真2 佐賀県放送コンテストの様子

任された役割を果たすことの喜びを感じさせ、進んでチャレンジし、成し遂げる原動力を持った児童に育てたいと願いをこめた実践であった。

## 5. 今後に向けて

ICT機器を有効に活用することは、意欲を高めるとともに、わかりやすい指導につながり教育効果を高めることができる。本実践では、タブレットPCを動画撮影用カメラとモニターとして活用することで、すぐに自分の成果をふり返られるように活用した。教師が何を言いたいのか、どこを自分が直せばいいのかを、ビデオとテレビをつなぎなおすような準備時間をとられずに、簡単にわかりやすく確認することができるタブレットPCは今後活躍の幅は広がるだろう。

タブレットPCは持ち歩き、体育館のステージや教室でも簡単に撮影し見ることができると、練習場所での準備時間を大幅に短縮できる。どこへでも持ち歩き練習場所を問わないことと、操作が指一本でできるなど簡単であることが子ども同士で学び合う協働学習にもつながることがポイントである。教師が示した立つ姿勢や目線の動き、歩く動作などの視点を示し指導を繰り返すことで、自分たちで評価し合い、改善する姿を見ることができると、納得しながら練習を効率的に行うことができる点がICT活用の利点である。協働学習を進め児童に自信と意欲を持たせるために、今後も様々な実験を伴う理科や、実技を伴う体育、図工、書写などの教科においても活用していきたい。